

特別企画

新春対談

対談完全版

とうかえ
「なら燈花会」を形づくるのは、
1300年の歴史



— 2万の灯りに宿る美しさは奈良の根底に流れる精神そのもの —

清岡
Kiyooka Yoshinori
義教

中野
Nakano Satoko
聖子

尾形
Ogata Hiroaki
裕明

HOKEN SOKEN

株式会社保険総合研究所。



株式会社保険総合研究所
代表取締役社長

清岡 義教

NPO法人なら燈花会の会 前会長
株式会社ホテルサンルート奈良
代表取締役社長

中野 聖子

NPO法人なら燈花会の会 現会長
社会保険労務士尾形事務所

尾形 裕明

清岡:今年20周年を迎えた「なら燈花会(とうかえ)」。今では95万人の見物客が訪れる、奈良の夏を代表する風物詩となっています。私にとっても20代の頃はボランティアスタッフとして、現在は協賛という形で参加させていただきながら、毎年家族で楽しみにしているお祭りです。今日は、そんな「なら燈花会」を主催する「NPO法人なら燈花会の会」の前会長の中野さんと現会長の尾形さんにじっくりお話を聴ける機会とあって、楽しみにしてきました。まずは「なら燈花会」の成り立ちから教えていただけますか?

中野:奈良への観光客誘致や宿泊客の増加を目指して奮闘されていた諸先輩方が、1998年に「奈良公園を無数の行灯で彩るイベントはどうか」と発案されたのがきっかけです。さっそく消防署に相談を行ったところ、「文化財を燃やす気ですか!」とお叱りを受けたそうで…。「行灯一つに対して消火器一つつけるくらい安全でないと許可できません」とのお話に知恵を絞った結果生まれたのが、水の上にろうそくを浮かべる今のスタイルだったそうです。

清岡:うそくが倒れれば、おのずと水がかかって火は消えますから、まさに「行灯一つに消火器一つ」が実現できたわけですね。すばらしい発想ですね。翌年の1999年に初開催されて、今年20周年。水の上に

中野 聖子(なかの さとこ)

NPO法人なら燈花会の会 前会長

1968年、奈良県生まれ。生家は大正時代から奈良市で映画興行をはじめた尾花劇場。その後、同地にて生まれ変わったホテルサンルート奈良の2代目社長として活躍中。土地の歴史・文化・信仰を住民がよく知ることこそが奈良のおもてなしの根幹と考えるようになり、さまざまな地域活動に携わる。現在、NPO法人なら燈花会理事長も務める。

尾形 裕明(おがた ひろあき)

NPO法人なら燈花会の会 現会長

1973年、奈良県生まれ。1998年、社会保険労務士の資格を取得。“伸びる会社の智恵袋”をスローガンに開業、2018年社会保険労務士尾形事務所として法人化。自身も心を動かされた、「なら燈花会」でしか味わうことのできない“手づくりの絶景”を、全国から訪れる見物客に届けようと、開催前の355日も大切に広報活動をはじめ奮闘する日々。

NPO法人なら燈花会の会 事務局

〒630-8244 奈良市三条町547

TEL:0742-21-7515 メール:info@toukae.jp URL:<http://www.toukae.jp/>

浮かべたからこそゆらゆらと火が揺れて、より幻想的な世界観を醸し出しているように思います。



中野:「なら燈花会」は、本当にたくさんの方々からお叱りやご意見をいただいたいて今があるんですね。中でも興福寺の貫首であられる多川俊映さん(日本経済新聞コラム「私の履歴書」にて11月に連載)からは、「火を灯すだけのイベントには絶対にしてはならない。な

ぜ、この地で火を灯すのか?根底にあるものが大切。日本書紀の昔にまで歴史を遡ってみると、人間にとて火とは神様からいただいた最大にして最高の贈り物であることを忘れてはいけないと熱いご指導を受けました。奈良公園で火を灯すとなぜ美しいのか。それは夜の闇が深いからだと。辺りを明るくするために火を灯しているのではなく、奈良公園の夜の闇の深さに気づくことに火を灯す意味があるんだと。

清岡:鳥肌が立ちました。なるほど、灯りがあるからこそ、闇の深さを知ることができる…。深いですね。

尾形:毎日燈花会を見ていると、多川さんがおっしゃる「闇の深さ」が沁み入るように分かります。全国には広くて暗い場所は数多くありますが、奈良公園という土地でしか感じることのできない火の美しさがあるんです。

中野:東大寺の大仏をお造りになった聖武天皇は、自分の富と権力だけで建てた大仏には意味がないとおっしゃられたそうです。「事は成り易いが、願いを成就し難い」と。少しずつでもみんなで力を合わせてつくる大仏だからこそ、尊いのだと。その考え方には、1300年の歴史がある奈良、大和という場所の根底に流れる精神そのものではないでしょうか。だからこそ、「なら燈花会」も一人ひとりが小さな火を灯して創り上げることに意味があると思っています。

特別企画 対談完全版

100年続くお祭りへ 20周年に誓った新たな決意

清岡:今年、20周年という節目を迎えられ、中野さんから尾形さんへと会長職をバトンタッチされました。お二人はこの節目をどのように感じていますか？

中野:諸先輩方の「100年続くお祭りにしよう！」との熱い想いで始まった「なら燈花会」ですが、私はある方からいただいた「20年続いたらあとは勝手に続いていくよ」という言葉がすごく心に残っているんです。そうか、だったらまずは20年と思って頑張ってきただけに感慨深いですね。もちろん、諸先輩方にとっても悲願だったと思います。

清岡:20年というと、伊勢神宮や春日大社の式年遷宮の年にもあたりますね。大きな意味があるように感じます。

中野:そうなんです。式年遷宮は神様のリフレッシュのためと言われることもありますが、実はそうではなくて、20年に一度、技術や精神、文化など、後世に継承していくべき価値あるものに人々が気づくための仕組みなんだそうです。また、20年刻みであるがゆえに、20歳、40歳、60歳という、人生のまだまだひよっこから経験しつくした熟年まで、3世代が同じ仕事に携わることができ、それらを伝達し、継承していくことができるそうです。今年、「なら燈花会」も20周年を迎えてほんまほんの光を放ちはじめました。だからこそ、この20年という節目での尾形さんへの引継ぎは、本当の意味でのバトンタッチにしなければと思っていました。

清岡:尾形さんは、責任重大な節目のバトンを受け取ったわけですね。

尾形:正直、すごくプレッシャーを感じています。20年続くということは、イベントではなく伝統行事と呼べる域に達したわけですから。継承しつつも、次の20年先を想像しながら新しいチャレンジをする攻めの姿勢を忘れずに、兜の緒を締める気持ちで取り組みたいと思っています。

清岡:すでに、新たな20年に向けて動かれているかと思いますが、ビジョンを少しお聞かせください。

尾形:実は、いざお祭りが始まると会長のやることはそれほどないんです。準備段階である355日をいかに過ごすか、これに尽きます。まずは、もっとたくさんの人に知ってもらうために、PR活動に力を入れていきたいです。中野さんが続けてこられた、「奈良学」という大学の授業でのPRはもとより、奈良市外特に県外の方々へのPRをどうしていくか。予算があれば、近鉄電車にラッピング広告などもしたいですね。とにかく、経験は自信に繋がるので、やれることをどんどんやっていくと思っています。

「参加しなければ、夏が終わらない！」 若者やシニアの情熱がすごい！

清岡:お話をうかがっていると、奈良は「守りたい」「守らなければ」と思わせるものが非常に多い場所だと改めて感じました。

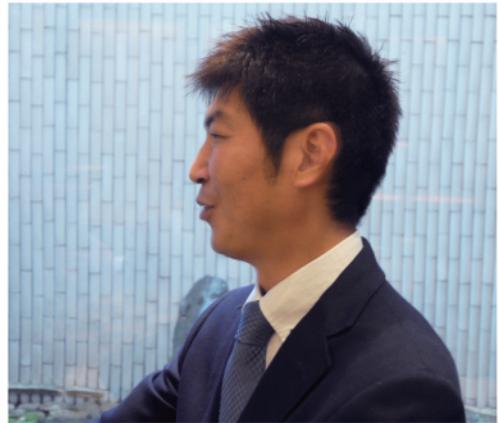
中野:イベントやお祭りも100年経てば文化財になりますよね。守りたいという気持ちが100年という時をつなぐんです。「なら燈花会」も20年続いたことで、古くからある伝統行事だと思っている子どもたちもいます。学校で好きな伝統行事はなんですか？と聞かれて燈花会と書く子がたくさんいるとも聞きました。嬉しいですよね。

清岡:それこそ、親子3代でボランティアされている人もいるんじゃないですか？

尾形:いますね。それもすごく誇りに思っていただいている。

中野:学生の中には、「一度も燈花会を手伝いに行かないのは気持ちが悪い」と言ってくれる子もいるんですよ。もう、生活にしみついてしまっているというか、燈花会に手伝いに行くのが当たり前という感覚にまでなってくれていて。

尾形:シニアの方々も熱いですよ。情熱のすごさに圧倒されます。先日オーストラリアのキャンベラで開催された出張燈花会にも、会社をお休みしてまで行ってくださる方もいて。これはもう生き甲斐と呼べるんじゃないかな。



清岡:自分の人生になくてはならないものになってきているんですね、すごい。

中野:そうですね。初開催された1999年頃って、2010年の平成遷都1300年をなんとか特別な年にしたいという思いが、行政や諸先輩方をはじめ、奈良を愛する人々の心の中にあって、種まきをはじめた頃だったと思うんです。その当時の若い人たちが、叱られながら、壁に当たりながらも守り育て続けたものの一つである「なら燈花会」が、このような全国的にも稀にみる成果を出しました。この成果は、奈良の人たちに「奈良でも新しいものを生み出していいんだ」という自信と勇気を与えたんじゃないかなと思います。実際、その後にたくさんのお祭りやイベントが生まれましたから。尾形さんも去年から新しいお祭りを手掛けいらっしゃいますよね。

尾形:はい。「なら燈花会」から1日だけお休みをいただいて（笑）。

清岡:過酷ですね（笑）。

尾形:「ならまち 遊歩」という、昔ながらの街並みが残る「ならまち」に提灯を吊るし、まち歩きと飲食などさまざまなお店を楽しんでいただくお祭りをさせていただいている。奈良への観光客は少なくないんです。宿泊客が少ないからそう見えるだけで。平日でもたくさん的人が歩いています。宿泊施設も増えたので、いかに夜の奈良を楽しんでいただける仕組みをつくるか、頭を悩ませながら挑戦しています。

清岡:私も国内外問わず、観光客は非常に多くなってきてていると思います。先日、300年ぶりに再建された興福寺中金堂の落慶法要も行われましたよね。今、奈良はますます勢いづいているように思うのですが？

中野:空気感が変わっていますね。まさに、天平の風が吹いているともいいましょうか。社寺の勢いが増せば増すほど、こちらにも追い風が吹く仕組みは奈良では鉄板なんですね。だからこそ、社寺を守っていくことやそちらに心を寄せる人たちを増やしていくことは、宿泊業を営む者として、一番大事なことだと思います。そのためにも新たなアクティビティは必要で、「なら燈花会」もその一つなんです。ただ、この地で新たなお祭りなりイベントなりを企画する時、かならず奈良が持つ精神性や歴史を土台にしたものでなければならないし、でなければ続かないと思っています。奈良にある太古からの大いなる意志のようなものに、ちゃんと乗っかった根も葉もあるものでなければ非常に危険。まったく関係のないものをつくる時間と労力があるなら、もう一度土地のささやきに耳を澄ます方が、よっぽど大切だと感じるんです。

清岡:奈良はまさに掘れば掘るほど面白い宝の宝庫というか、この宝の山にそっぽを向いてまったく関係のないことをすることに違和感もありますね。

特別企画

対談完全版

中野:そうなんです。ありすぎるからこそ、逆にハードルが高くなってしまうのか?と思ったり。最近はやりの「刀剣乱舞」というゲーム。日本刀を擬人化したことで、世界中で大ヒットしていますよね。京都の刀展には、若い女性や海外からのファンが押し寄せているとか。何かに興味を持ってもらいたい時、どう興味を持ってもらうのか、頭をひねる必要があると思うんです。歴史上の人物の感情に共感できるでもいい。何か接点を感じることで人は興味を持つんだと思います。

尾形:奈良には古きを訪ねるものはいっぱいありますから、どう加工するかが今後の課題ですね。

祭りへの参加を企業が後押し 地域一体となって奈良を盛り上げる 仕組みをつくろう

清岡:奈良の持つ歴史自体が、奈良の人にとっての財産でもありますよね。その奈良を盛り上げるために切磋琢磨されているお二人との鼎談は、私にとっての財産でもあるわけで。今年は誰と対談させていただこうかと思った時に、20周年を迎える「なら燈花会」はどうだろう? だったらこのお二人に連絡を取ろうと気軽に電話できる環境があるのも、奈良らしいなと思うんです。

尾形:本当にそうですね。

清岡:先日、東京から奈良に来られたお客様がわざわざ前泊して観光されたたそうで、「奈良は熱いね!」っておっしゃられて。そうか、奈良は熱いのかと。若者がSNSで宣伝してくれている様子も見かけますし、好きだという気持ちは学ぶことに繋がるわけじゃないですか。それって、「なら燈花会」が単にきれいだねとか、デートにいいねで終わらず、なぜこんなに美しいのだろうと、奈良公園の闇の深さや歴史にまで想いを馳せるきっかけになるかもしれない。そのためにも、まずは発信したくなるような「体感=自分で味わう」という経験が大事なのかなと感じました。

中野:まさに、おっしゃる通り。

清岡:そのために自分も始められる一つの提案として、「なら燈花会」有給制度はどうかと。お祭りの参加を企業が後押しするんです。

尾形:いいですね! 大企業で一部されているところもありますが、奈良の企業全体でそのような動きがあれば、奈良のまち 자체が変わっていくと思います。

清岡:そうですよね。個人だけでなく、企業自体が「なら燈花会」にかかるって、奈良らしいじゃないですか。会社としても何かお手伝いできる環境があればいいなと今回改めて感じました。奈良の文化をまず

は自分から発信していきたいと思います。

中野:素晴らしいですね。個人、企業、行政すべてが一体となって奈良が盛り上がっていく。最高ですね。

清岡:まずは、次の20年に向けてスタートを切った「なら燈花会」のこれからを楽しみにしています。

本日はお忙しい中、ありがとうございました!

中野/尾形:こちらこそ、ありがとうございました!



「鼎談こぼれ話...」

清岡:お二人が特に印象に残っている「なら燈花会」のシーンは何ですか?

中野:キリン一番搾りのCMですね! 尾形さんも一緒に出てね。楽しかったね~!

清岡:あのご当地ビールのCMですね!

尾形:でも寒かったです~(笑)。

中野:4月の夜の奈良公園は寒いんですよ(笑)。なのに、スタッフ専用の通称「赤T」を来てね。キンキンに冷えたビールを何度も飲んで…、凍えました(笑)。でも、日本のCM技術のすごさを目の当たりにしましたね。

尾形:うそくカップの一つひとつを微妙に動かして、できあがった映像を見たらまるでCGかと思う美しさで。

中野:YouTubeで見られるので、ぜひ私たちの雄姿を見てください(笑)。

清岡:「キリン一番搾り 燈花会」で検索ですね。さっそく見ます!

中野さんと尾形さんが出演している
キリン一番搾りのCM、是非ご覧下さい!

キリン一番搾り 燈花会



対談のショートムービーを
こちらからご覧になれます▶▶
<https://youtu.be/ewtRWkWHbtA>

